

## 今までの人生、これからの人生

それは生まれて間もなく訪れるであろう紆余曲折の人生を、苦痛と共に歩むことを知る由もなかった幼少期の自分がいた。

その時は二歳ぐらいから始まった。

最初に現れた現象は、手を何度も洗う事である。これだと多少神経質な幼児と片付けられるだろう。

しかし、その手の動きは頭の中に浮かんできた得体の知れない物、或いは化け物を退治する手段として身につけたものだ。

それから幼稚園に入ると、イライラが止まらず落ち着きがなくなり、自分の事が嫌で溜まらなかつた。

これは年を取る度に酷くなり、小学校に入学した頃には新たな段階へと入っていた。

まず、手の甲を噛む癖が出てきて、頭の中の現象が酷い時には血が出るまでに噛み続ける、そんな日々が続いた。

勿論、勉強、運動が出来る筈もなく、直ぐに目を付けられイジメの対象となつた。

酷い暴言を吐かれたり、嫌で仕方がないあだ名を付けられ、大声で罵倒する、そんな日常が続いた。

また、暴力も当然出て来ては、母が学校に出向くこともあった。

しかし、その時の教師は守ってくれる処か、貶めるような態度を取っていた。

事もあろうにテストで私を置いて、他の皆は正解だったと怒ったのだ。

教師の不振はそこから始まる。

授業中は頭に浮かんでくる不毛なものと戦う為、全く頭に入らない。

その度に叱られ、同級生からは馬鹿にされた。

作文を書く授業では、一人が私に付けたあだ名で侮辱的な内容の作を披露したが、教師は一向に注意しなかつた。

卒業をしても心は晴れなかつたが、中学に進学するも更に強烈を極めたイジメが待っていた。

まず小学校二校が一つになり、イジメを受けていた話が広がり、一気に暴力暴言の的にされていった。

中学でも勉強は当然出来ない。それを良しとして授業中に問題を間違えると、一人が立ち上がり、私を蔑むように言葉を吐いた。

その間、教師は見てみぬふりをして、注意も何もすることはなかつた。

こうして逃げ場がないと思っていた中学校生活で、ただ一つ、部活動だけは唯一の救いの場であつた。

写真部でもそれでも気の合う仲間数人で楽しく作業をしていた。

そんな中でも病気は進行し、三年生になった時点で修学旅行を辞退するに至った。

それを聞いた担任は、冗談だろと言ったのだが私は本気だった。

守つてもくれない教師を信じる事は到底出来なかったし、修学旅行でも嫌な思い出を作るのが耐えられなかったからだ。

その後、家には校長と学年主任が訪れて説得をしたが、拒否した。

やがて卒業し、そのまま働こうとしたが、周りの人間に高校だけは出ておけと云われ仕方なく試験を受けることになる。

只、自分の中では殆ど出来なかったと感じていたが、ギリギリで合格を手にした。

高校でもイジメの対象になるかも知れないと、覚悟を決めていたが、それ程のこととは意外にもなかった。

只、この原因不明の症状が大きくなり、結局二年生の二学期にて学校を去る事になった。

それから仕事を探し、イラストを描く会社にアルバイトとして入る事に成功した。

家の本でその中の童话のイラストを頼まれ描いた。それは必死だった。

しかし、良かった期間は其れだけで、直ぐに破綻する事になる。いつまで経っても連絡が来ないのだ。

痺れを切らして電話を何回か掛けたのだが、ようやくその本とアルバイト料が入った封書が届いた。しかし、次に繋がる仕事の連絡は一切来なかった。

それから三件程、アルバイトで入るも、長続きしなかったのである。絶望感に立たされた時、カメラ屋の募集を見た。直ぐに連絡を入れ一発でアルバイトとして採用された。

始めは現像用品から三脚、カメラバックと、それらの販売を任された。病気は相変わらずだったが、居心地は良かった。

しかし、症状が強くなると人のいない場所で、頭を何度も叩き付ける様になる。勤めていたのが本店だったのだが、半年程で支店に回されることになる。

『役立たず』という気持ちで降り立った支店の店長を始め、現像技師の男性は爽やかだった。はじめは…。

やがて写真現像の手解きを受け、処理に貢献する事が出来た。

初めて仕事が楽しいと感じたひと時だった。

それからは、現像通し、プリントの検品、レジでの対応、全てが上手くいっているようであった。

そして一年が過ぎようとした所に社長が訪ねて来ては、喫茶店で話があると言われる。

「ああ、首かな？」と身を引き締めたが、その反対では非正社員になってくれと頭を下げられた。

慌てて此方も頭を下げ、誠に恐縮の限りである。

かくして二日時間を頂き、考え抜いた結果、受け入れることにした。

それからしばらくは安泰だった。処が…。

現像技師が振ってくる話に着いていけず、次第に険悪になっていく。

その人間が知っている事が解らないのは仕方が無い事ではないだろうか。

其れからは店長は非常に良くしてくれるのだが、現像技師は気に食わないのか、プラスチックの椅子を壁に叩きつけたり、プリント機に当たるようになる。

そんな毎日が続く中、昼に昼食を控室で食べていると、身体がおかしい。

そう思った途端、我慢出来ない程の発作に襲われ、呼吸が殆ど出来なくなる。

何とか机にへばり付き、呼吸を整えるようにしたが、冷や汗が吹き出し、顔面は真っ青になった。

約三十分程、苦しんだ後、元の状態に落ち着きを取り戻した。

これを皮切りに発作が頻繁に出るようになる。

精神科や内科に行ったのだが、原因は分からずじまい。

それから約五年間、辛抱したのも束の間、このカメラ屋を我慢出来ずに辞める事となる。

それから、冬が訪れ、友人の伝手の元、山小屋で少し越せる事になり、正月を山で暮らした。

真夜中、友人が焼く蟹が美味しくたらふく食べたのだが、焼いてくれた友人は殆ど食べれなかつたと今も話のネタになっている。

それから少しして、新しいカメラ屋にアルバイトとして入る事になる。

ここでも本店に少し居た後、支店に配属となった。

支店に行くのと店長を始め、その他の従業員が暖かく迎えてくれた。

此処で初めて自分の居場所が出来たと感じた。

しかし、病気は酷くなるばかりで、その当時世話になっていた心療内科のクリニツクの先生は、高飛車で右脳に米粒大の穴が開いていると決めつけた。

それを聞いてショックを受けたが、通う度に態度が横暴になり、仕舞には一生直らないとタバコを吸いながら伝えた。

其処のクリニツクを止めて、次に探すも笑われたり拒否されたり散々だった。

そんな感じで職場の雰囲気も空気が変わり、辛さを感じるようになってから、あの阪神淡路大震災が発生した。

それでも会社に歩いてでも顔を出さねばと思っていたが、大阪から迎えに来た次男が残ると行った私に、恫喝紛いに自動車に乗せ大阪まで行く事となった。